# 西欧・東欧見聞録

（ベルリンの壁崩壊前のヨーロッパ紀行）

# 西欧・東欧見聞録（ベルリンの壁崩壊前のヨーロッパ紀行）

## 情熱のスペイン

　途中はまったく覚えてない。ふと目が覚めたら、何となくがさがさしている気がしたら私の下に寝ていたおじさんが“ポート・ボー”といって起こしてくれた。まだ、夜である。そうこうしているうちにガタゴトとスペインの国境駅のホームに列車が滑り込んだ。
　ヨーロッパの鉄道の軌間は 1435mm の標準軌だがスペインは 1620mm の広軌である。通常の列車は直通できないので、この駅で乗り換えになる。ヨーロッパ標準軌がこの駅まで引かれている。この不便さを解決したのが、スペインのタルゴ列車で、短い連接車体の列車が自動的に軌間変更を可能にしたものでジュネーブ-バルセロナ、マドリッド-パリ間などに直通列車が走っている。
　隣のホームには列車が止まっていて、電気もついていないのに降りた乗客がいっせいにこの列車内に向かって走り出した。これがこれから乗る予定の 7:15 発のバルセロナ行きなのかと私もつられて乗り込んだが、すでにコンパートメントはみな一杯になってしまった。やられたと思ってみていたら、日本人 2 人が乗り込んでいるところがあり、あいてるかと聞いたらどうぞとの事でたすかった。私が入り込み、6 人がけのコンパートメントは私たち日本人三人と、スペイン人？3 人で一杯に。その後は、通路まで人があふれた。とりあえず、席を確保したので安心し、売店にスペインの時刻表を買いに行った。スペイン語で時刻表を何というのかわからなかったので”Time table”といったら”Holario?オラリオ”と帰ってきた。わからないので”Si”（はい）と答えたら時刻表がきた。（本当は、このわからないのに、はいととりあえず答えてしまうのは､日本人のメンタリティとしては良くないとは世界的に評価されることではあるが)。コンパートメントに戻り、日本人の 2 人と自己紹介しあった。
　同年代の女性と男性だったので、てっきりアベックのバックパッカーかと思っていたら全然別で、女性（A さんということにする。）はイタリアからコートダジュールを経て一人旅をしているつわもので、しきりに地中海のすばらしさを話していた。これから、ポルトガルに向かいユーラシア大陸最西端の岬まで行くとのことだった。男性のほうは（今後 N 君というが)、シェフの卵で大阪の辻料理学校からリヨンに長期修行に来ているらしいが､夏季は滞在している寮が､旅行者のために解放されるので一ヶ月間そこを空けなければならないとのことで､ぶらり旅に出てきているそうだ。お互いに、いままで見てきたところや、今後の予定を話したりして情報を交換し合った。スペインの今までとははるかに異なる景観のもとをひた走り、9:59 スペインの列車にしては珍しく定刻にバルセロナ、サンツ駅に到着した。本来は、海辺のテルミニ駅が終着となるところだが､現在､バルセロナオリンピックに向けてかどうか知らないが工事中とのことで、しばらくはここがバルセロナの中心駅になるようだ。
　いままでは駅の構内放送はあまり聴かれなかったが、サンツ駅ではスペイン語独特の

構内放送が頻繁に流れていた。A さん、N とともに両替を済ませた後、互いのこれからの旅の成功を祈りあって別れた。とりあえずの地理的知識はテルミニ駅周辺の情報しかなかったので、インフォメーションでその近くの宿を取ってもらい、また例のごとく地図をもらったが、これはエル・コルテ・イングレスというデパートが作っているものでとてもきれいで良くできたものだった。マドリッドでも同じような地図があった。

バルセロナは人口 164 万人の、カタルーニャ地方の中心都市。1992 年オリンピックが開催された。またアントニオ・ガウディの建造物で有名である。地下鉄でテルミニ駅に向かうが、スペインではすりや置き引きに注意と聞いていたので、今まで以上に意識して乗った。しかし、結局、まったく安全で快適であった。

テルミニ駅の近くに行って宿を確保した。Hostal Residencia La Hipica というものでとりあえず 2 泊の予定とした。食事は、宿の前のレストランが良いと勧められたので、そこで食べる。サングリア 5 人分ひとりで飲んでしまい、したたかに酔ってしまった。料理も安くて美味しい。宿でひとねしたら二日酔い。がんがんする頭で、シウタデーリャ公園へ。徐々に酔いから醒めつつあるのでバルセロナ港に行き、港内遊覧船にのった。コロンブス記念碑がありここから伸びる通りがバルセロナ１の繁華街ランブラス大通りである。

明るく開放的な港町。実家にまた絵葉書をしたためた。夕飯は宿の近くの店で食べた。鶏のオーブン Pollo Asado にした。再びサングリアを、今度は一人分だけ飲んだ。食後にアイスコーヒーを頼んだらびっくりした。レギュラーコーヒーがコーヒーカップに入ってきて、さらに氷入りのグラスを持ってきてくれた。なるほど、グラスにコーヒーを入れるのか。確かにスペイン語でアイスコーヒーを“カフェ・コン・イエロ（氷つきのコーヒー)”というが、確かにその通りである。それにしても、なんと明るいバルセロナの陽光であろうか。通りを日本の真新しい真っ赤なセリカが走っていく。また、ホンダのバイクが目立つ。また、先ほど両替をして気がついたが、公共の建物や銀行などの中には、必ず自動小銃を持った警官が警備していたのには驚いた。迎え酒の、ほろ酔いで心地よくなり再び港を散策してオスタルに戻る。シャワーを浴びにいったら、何にもないところに紐を引っ張ると上からシャワーの水が出てくるだけの簡単なつくり、しかもお湯でない。まあ、まわりも暑いことだし、これがスペインなんだと納得し、その日はゆっくり休んだ。

翌 7 月 24 日、成田を出てから 3 週間になる。さすがにもう旅も慣れた。今日は町をぶらつこう。まずカタルーニヤ広場のエル・コルテ・イングレスというデパートでサンダルを買った。とても今までの靴ではむれて仕方がない。このデパートは、主要都市に行けば、必ずあるし、きれいで便利で、スペイン旅行中は何かと世話になる。広場で休んでいたら偶然、ポート・ボウからの列車で一緒になった、リヨンでフランス料理の修行中の N 君と会った。近くのレストランで食事。彼が勧めてくれたデザートがおいしかった。また、隣の席に、家族で食べに来ているスペイン人の一家があったが、そこの小さい女の子がかわいいこと。まるで人形のようにかわいい。

ついでモンジェイクの丘に行った。フニクラで上に登る。ここはオリンピックのメインスタジ

アムになるようで、あちこちで工事中だった。ふと売店で、なにやら騒いでいる二人の日本人がいる。どうやら、何かを買ってまけろと値切っているらしい。時折、関西弁が飛び出す。そしたら驚いたことに、N 君が彼らに話しかける。“おおしばらくやなー。偶然やナー”。なんと彼の同僚だった。同じく、リヨンで料理の修行中らしい。漫才のような話をしてったあと、タクシーをつかまえて嵐のように行ってしまった。颯爽とし、すがすがしい関西人。たのもしい限りであった。

モンジェイクの丘からは、紺碧の地中海、またバルセロナの町並みが見下ろせる。しかも陽光まばゆいまさにスペインの町。（しかし、まだバルセロナはヨーロッパ的であり、これからスペインの奥地に行くに従って、その真髄に触れることになる。）カタルーニャ広場からポプラ並木のランブラス大通りを少し歩く。大道芸人もいるが、ラテンの音楽や、インディオの音楽であり、これもまた今までと異なる。　　（モンジェイクの丘にて、バルセロナ港を望む）

夜は、私の宿の近くのレストランで一緒に食べた。彼がいろいろ教えてくれた。ガスパチョがおいしかった。彼に言わせると一級のガスパチョだと。しかも飲んで食べてでも安い。スペインにきてからは食生活にはずっと満足している。バルセロナも気に入ってしまい、もう一泊増やすことにした。そして、スペインでは優等列車に乗るには座席指定が必要だと聞いたので、ここで今後のある程度の予定を立ててしまおうと思った。ホテルで、
時刻表を片手に作戦だ。あさって 7 月 26 日にはマドリッドに行こう。そこで 3 泊して、
次の 7 月 29 日にはコルドバへ、そこで一泊、7 月 30 日にグラナダへ、ここではフラメンコを見る大事な目的があるので 2 泊、その後 8 月 1 日にはセビーリアへ、ここでも有名なフラメンコを見て 2 泊、8 月 3 日に再びマドリッドに戻ろう。

（バルセロナ：リトラール通りにて）

翌日は切符の手配から始めた。窓口には長蛇の列。やっと順番になって、窓口へ。口でうまく伝わるかわからないので、あらかじめ列車名と時刻を紙に書いて渡した。すると、番号札を渡してくれたがこれが５００番台。番号が表示されたら受け取り場で切符を受けとってくれとのこと。しばらく番号を見ていたが、まだ１００番台で、しかも一向に進まない。待っているときに、スペインの子供が俺にむかって“オラ、オラ”と盛んに言ってくる。なんか文句でもつけているのかと思ったら、よく考えたら、スペイン語で”Hola”（こんにちは）のことだった。番号の進み方を見ていると、どうもこれから 2 時間はかかりそうだ。待っていても仕方がないのでサグラダファミリアに行くことにした。そしたらなんと、ここででまた N 君とあった。偶然を喜びあった。

アントニオ・ガウディの偉大な未完成の建造物をみた。正式名称はサグラダ・ファミリア贖罪聖堂というそうだ。完成まではまだ何年かかるかわからない。確かに、上のほうは工事中である。日本人も工事に関係しているらしい。そこで昼飯まで食べて、そろそろ切符が受け取れる頃かと、N 君にもつきあってもらってサンツ駅に戻る。すばらしい、私の番号がまさに表示される直前であった。ほんの少し待つだけで切符を得ることができた。それにしても、こんなに時間がかかるとは思わなかった。スペイン国鉄 RENFE は結構儲けているのかな。共産圏の切符売り場も長蛇の列で、しかも切符がもらえるまでさらに時間がかかるのだが、もともと列車の本数自体が少ない。それに対して RENFE は結構な本数が走っており、バカンス客などで混雑するのであろう。次にどこに行こうかと話し合い、グエル公園に行こうということになり地下鉄に乗りそこに向かった。ここは小高い丘の上にあり、もともと世紀末の英国で提唱された田園都市構想をま

ねて、グエル氏が開発しようとした分譲住宅地である。分譲計画では６０戸であったが、実際に完成したのは 2 戸だけで、その跡地を公園としてバルセロナ市が管理しているものである。この製作にあたったのもアントニオ・ガウディである。いかにもガウディらしい色彩、形にあふれた公園。中には、晩年ガウディが住んでいた建物がガウディ博物館となっていた。バルセロナにはほかにもガウディによる建造物があふれている。Lesseps という駅から今度は Diagonal と言う駅まで行って、ミラ邸（ラ・ペドローラ）を見ながら、パセチ・デ・グラシア（グラシア通り）というバルセロナの高級ブティック街を歩く。ここで食事をして、お互いの前途を祝して別れた。N 君は、もともと仙台の出身らしい。仙台にお互いの連絡先を教えあい、彼は、日本に帰ってレストランを開いたら、ぜひ来てねとのことだった。さて、あたりはすっかり暗くなった。

地下鉄で宿に戻る。地下鉄も、この時間になると乗客も少なく、パセチ・デ・グラシアからバルセロネータまでの間はちょっとばかり緊張した。宿に帰ると、もうすでに切符も手に入れてあり列車の予定も全て決まったので、なんとなく安心であり、これから訪れるスペインの町々に思いを寄せた。出だしのバルセロナはとてもよかった。ガスパチョの何とも言えない、さわやかなおいしさも忘れられない。

今日はいよいよマドリッドに向かう。大都市のようだがいったいどんな町だろうか。
期待が膨らむ。サンツ駅に向かい、まずは朝食をとり列車の中で食べる物やミネラルウオーターを買い込む。ミネラルウオーターには炭酸無しと、炭酸入りがあり、それぞれ
“アグア・シン・ガス”と“アグア・コン・ガス”という私は、今回は“アグア・コン・ガス”の小さいほう（ペケーニョ）にした。“アグア・コン・ガス、ペケーニョ。ポル・ファボール。”果たして、3 ヶ月の突貫工事で覚えたスペイン語が通じた。列車が入線してきて乗り込む。これは急行であるが、中はきれいだしリクライニングシートだ。これなら、快適な旅ができそうだ。バルセロナ 8：30 発、タラゴナ 9：37、サラゴザ 12：46、グアダラハラ 16：11、マドリッド 17：00 の予定である。予定でも 8 時間半の長旅であるが、ここはスペイン一時間程度は遅れるだろうなどと、たかをくくっていたが、後に考えが甘いことを思い知らされる。発車間際には、満席になってしまった。

日本のように発車のアナウンスがあり、マドリッドに向けて走り出した。市街地を抜けると、しばらく地中海沿岸を走る。やがて内陸に入ると、いかにもスペインらしい風景になってきた。赤茶けた荒野に潅木が入りまじる乾いた風景。しばらくすると、なんだかわからないが乗客にお辞儀をしてお金を恵んでもらってる、赤ちゃんを抱いた母親が回ってきた。周りの人も、お金をあげているので、私もなんだかわからないが 100 ペセタほど渡した。スペインの列車では、時々、このような風景に出くわすことになる。ジプシーなのか。タラゴナまでは順調に走る。しかしそこからである。分水嶺のような山中に列車が止まると、それっきり動かなくなってしまった。まわりはやはり赤茶けた大地に潅木。太陽の光がまぶしい。そばに、小さな川が流れている。サボテンこそ無いが、アメリカの西部劇に出てくるような風景だ。

何か、スペイン語で放送があったが、私にはさっぱりわからない。この列車は、いわゆるロー

カル列車の類になるのか、英語での放送などない。周りのスペイン人が騒ぎ出した。
ブーイングの声も聞こえる。なんだかえらく遅れそうな気配である。周りの騒ぎように、暴動でも起きそうな気配を感じ取って一瞬、身の危険を感じたのだが、そのうち周りのスペイン人たちはウノを始めたり、歌いだしたりで、宴会のようになってきた。さすが、ラテン人種だ。後ろの席のグループがウノに興じていたので、私はそれを聞いていてスペイン語の数字の復習をすることができた。“ウノ、ドス、トレス、クアトロ、シンコ・・・”。
一時間も停まっていただろうか、そしたら側線を後から発車したはずのマドリッド行きのカタラン・タルゴが通過していった。なんで、先に行くんだ。とすれば、事故ではないようだ。いくら優等列車を優先するにしても、ちょっとばかりひどいんじゃーないかい。
　二時間くらいしてようやく発車した。ちょっと金をかけてもタルゴにすればよかった。
周りは相変わらずの宴会状態。列車は、それでも途中で止まってはしばらく休むという状態で、サラゴザ到着の時点で 3 時間程度も遅れている。ううむ、スペインの鉄道恐るべし。
その後も何度か、途中で止まりながらも何とかグアダラハラへ、もうマドリッドは近い。
なんとなく都市近郊の趣があるが、すぐにまた荒野が広がる。外はだんだん夕暮れ時に近づいてきた。列車は、ようやく急行列車の面目躍如といった感じで飛ばしに飛ばす。
　やがて忽然と、夕闇の中に大都市が現れた。マドリッドである。人口 350 万人。スペインの首都。マドリッドの標高は 646 メートル（ヨーロッパで最も高所にある首都）、マドリッドの水道水はうまいと評判であることは（水道水が安心して飲めるの首都はここぐらい。またグラナダの水もうまいと聞いていた。）ウイーンで話した人に聞いていた。空港のようなチャマルティン駅に着いたのは 4 時間おくれであった。列車から降りるときに、村田君と知り合う。彼はサラゴザから乗り込んだとのこと。せっかくだから同じ宿に泊まろうと、
i で宿をとる。ここでも無料の地図をもらうが、あまりいいものではない。後日、やっぱりエル・コルテ・イングレスでもらったのが、バルセロナのものと同様にきれいでよかった。宿は、地下鉄でまず“Ｓｏｌ”（太陽）という名の、それこそ有名な“プエルタ・デル・ソル”（太陽門）のある、マドリッドの中心まで行って、しばらく歩いたカレ・ド・サンジェロニモの奥にあった。名前は Hostal Residencia Antoxo。きれいだし、宿の主人もいい人のようだ。アルゼンチンからの観光客（夫婦）がいたので、“ずいぶん遠くからきましたね。”といったら、私たちが日本人だと知ると“あなた方のほうが、遠いじゃないですか。”といわれた。確かに、アルゼンチンは日本からは遠いが、スペインからは日本よりはるかに近いのだ。スペインは、南米の人にしてみれば言語が一緒なので旅行しやすいのかもしれない。外はすごく暑かった気がしたのだが、屋内は涼しい。空気が乾燥してるからであろう。日本のようにむしむししない。水道水も確かにおいしい。村田君と連れ立って、夜の街に出た。プエルタ・デル・ソルの近くの中華料理屋で食べた。

　翌日は、村田君ともお互い自分で見たいところがあるだろうし別々に行動しようということになった。彼は、翌日にはマラガのほうに向かって出発するらしい。まずは、有名なプラド美術館に行こうか。外は非常に暑いが、乾燥しているせいかあまり汗をかかない。

宿のそばに国会議事堂があるというが、発見できない。あまり目立たないのだ。大きなとおりをシベーレス広場を経て、プラド美術館に向かう。周りの暑さにもかかわらず、木陰は涼しくしのぎやすい。プラド美術館では、ベラスケスなどの有名な絵を見たが、あまり感激はしなかった。しかし、別館でゲルニカを見ようと思ったら驚いた。警備が異様に厳重なのである。金属探知機の中を通らなければならない。通ってからしまったと思った。カメラバックをもったまま通ってしまってではないか。今まで、東ヨーロッパ諸国などで撮ったフイルムがシールドにいれずに入れてあった。もしかして感光したかも。まあ、仕方がない。あとで、現像してみよう。このような思いまでしてたどり着いたゲルニカはやはり違っていた。どこか、異様な雰囲気である。そのうち、また見にきたいと思う。そうこうするうちに、昼の時間となり、ガイドブックにもあったプラド美術館のパエリアを食べたが、これは若干の期待はずれであった。

昼食後は、プラド美術館のあるレティーロ公園を経て、プエルタ・デル・ソルに向かった。ここに大きな温度計があるのだが、表示はなんと 45℃。しかし、日本で感じる夏よりも過ごしやすい。やはり乾燥していてじめじめしないためであろう。おお！やはりこの一等地にはエル・コルテ・イングレスがある。スペインでの老舗、銀座の三越のようなものであろう。この中に、写真のラボがあり、やはり 1 時間仕上げとのことだったので、フイルム全ての現像を依頼する。そこから、カレ・プレシアードスという有名な通りを経てマドリッドの銀座（なんと日本人ぽい命名であろうか）とガイドブックに書いてあるグラン・ビアに向かう。革製品で有名なロエペの店などがある。また、1 時間仕上げの写真のラボもたくさんあり、みな日本にあるのと同じ、緑の富士カラーの看板であったのには驚いた。どの店にも、“写るんです“が置いてある。このフイルム一体型の使い捨てカメラは西ヨーロッパを席捲してしまっているようだ。日本人としてちょっとばかり誇りに思う。

ぶらぶらした後、エル・コルテ・イングレスに戻り、無料のきれいな市街地図をもらい写真屋にいくといきなり謝られた。どうやら、写真の一本がうまく現像できなかったらしい。この分の現像代はいらないといっているようだ。仕方が無いので、勘弁してやった。スペイン語で苦情を言うほど上達してないし、英語ですらうまく文句を言える自信がない。どうせだめなものは文句を言っても仕方が無い。しかし、どのフイルムをだめにしたのか確認してみてがっかりした。プラハから、ベルリン、コペンハーゲンにかけて撮影した、私にとっては得がたい一番大事な一本であった。非常にがっかりしたが仕方が無い。歩き疲れたし、昼寝（シエスタ）でもするか。

地下の食品売り場（日本と構造が似ている。）でスイカを買って、宿に帰る。乾燥した真夏のマドリッドを歩いた後の宿の涼しさは格別であった。しかも冷房など入っていない。ここで食べる冷えたスイカのおいしさも格別であった。しかし、このシエスタの習慣はスペインでは一般的で、みな仕事をしていてもお昼には家に帰り、食事をして昼寝をし 4 時くらいからまた仕事を始めて、7 時か 8 時ころ帰宅するようだ。確かに、午後 2 時頃の一番暑い時間に仕事をするのは非生産的であり、なかなかよく考えたものだと思う。現代では冷房も発達しているだろうし、屋内は涼しいのだが、むかしから習慣化したのであろう。これはアンダルシアに行くと、もっとその有難みがわかる。かの地では、湿度もあり

蒸し暑さが半端じゃなく、とても2時、3時には動く気がしなくなってしまうのである。
しかし昼寝というのも気持ちのいいものである。日本に戻ってからもしばらく昼寝の習慣が抜けずに、大学の午後の講義をサボることが多くなったのも困りものではあったが。

すっきりと目が覚めて、夕方再び散策に出た。ソルに行ってみると気温は43℃。今まで経験したことの無い気温が続く。今度は、マヨール広場に行ってみる。ジプシーの子供が、金をねだりにやってくる。これは無視して、散策。ナイフをぶらぶらしている、アブなさそうなアンちゃんがいたので、これは避けて通った。今日の夕飯は、また食品売り場で、なにか買っていって、快適な宿で食べよう。周りが暗くなってきた。ソルの気温計はいまだに 40℃。まだまだ体温より高い。宿に戻り、食事をし、マドリッドもなかなかいいところじゃないかと思って床に入る。明日は、アランフェスを通って、トレドに行ってみようなどど考えながらまどろんでいたら、宿のすぐしたの通りから悲鳴が聞こえる。何事だと思って、耳を澄ますと、“ポリース”という男の鳴き声。更にドスの聞いた“ポリース、ダズントカム“の声。何と、すぐ下の通りで辻強盗が起こっているのである。こんな、国会議事堂の近くで、安全だとおもっていたのに。更に、逃げる音。追いかける音。なんと私の宿に逃げ込もうとしたようだ。どんどんというドアをたたく音。なんだかやばい雰囲気になってきたぞ。再び悲鳴。宿には入ってこなかったが、私も、ナイフを固く握り締めて、息をのんだ。しばらくして、静かになった。おわれた男はどうなったであろうか。その後、ポリスのサイレンも鳴らなかったので、金を奪われた程度で、怪我や、はたまた殺されたりはしなかったのだろうが、なんとも恐ろしかった。今回の旅行で、もっとも怖かった出来事である。もう一度、部屋のドアの鍵を確認して眠った。

翌日の朝も、昨日の一件が気になった。なんだかんだいってやはりマドリッドは治安が悪いのだろうか。窓から下のとおりを見るが、流血の後などはない。まあ、自分も隙を見せなければ大丈夫だろうと、気持ちを落ち着かせ今日の予定を考えた。昨日と同じように明るい太陽が照り付けるマドリッドの町並み。しかし、今日は昨日とはちょっと違って見えた。なんとなく心細かった。しかし、恐れていてはこれから先、何もできないぞと自分で自分に言い聞かせ、今日の出発駅のアトーチャ駅に向かって歩いた。

アトーチャ駅は、大きな伽藍のような駅で、しかも人がごった返すような駅で無く静かで落ち着いていた。トレド行きの急行の発車時刻までまだ時間があったので、マドリッドからのパリ行きの切符をとってしまうことにする。早くも、スペインから出ることを考え出したというのも今にしてみれば、よっぽど昨日の事件がこたえたのであろう。セビリアから 8 月 3 日に戻ってくることは決めていたので、まあすぐにパリに行かずとも一泊だけしていこう。そのときは、もっと治安のよい地区に泊まろうと思った。そんなこんなで8月 4 日発の、パリ行きの国際急行“プエルタ・デル・ソル”の 2 等クシェッタの切符を手に入れる。朝ごはんはなんだか食べる気がしなかった。それでも、トレド行きの急行列車に乗って、窓の景色を見ていたら、気持ちが和んできた。

大都市マドリッドの町並み。しばらくすぎると、砂漠のような荒野になる。しばらく走ると、

途中アランフェスを通る。アランフェスは、王室の離宮があったところである。フェリペ 2 世の時代からフェルナンド 6 世の時代まで、アランフェスには一般の人々は住めなかったばかりか立入禁止であった。駅は静かな、樹木にあふれたオアシスのような風情がある。更に、列車は本線からはずれ砂漠のようなところを走り、アトーチャ駅から 1 時間ほどでトレドに着いた。小さな終着駅である。5 世紀にイベリア半島へ侵入してきた西ゴート族は、西ゴート王国を建国。首都をここトレドに定めた。しかしその栄華も町の中に見られるだけで、政治の世界から忘れ去られたようなこの町は、観光で有名になっている。

駅では、おじさんおばさんの日本人観光客の団体を見かけたが、この人たちは奈良からいらっしゃっているそうで、パンフレットを見せてもらうと、奈良市とトレド市が姉妹都市になっており、その友好関係を深めようとの奈良市が主催したツアーであった。なるほど、日本の奈良市と立場や今の状況は酷似しているような気がする。この人たちはバスで町に向かうようだが、私は、町外れのこの駅から乾いた暑い道を灼熱の太陽のもと歩く。途中、タホ川をアサルキエル橋で渡る。町の入り口のビサーグラの門まで、結構距離がある。さて、ここからカセドラルまで逆Ｓ字型に緩やかに曲がる坂道を登っていくのである。

ここからは、みやげ物の店があふれる。街には細工物の刃物が一杯売ってあった。シガロをくれと寄ってくる若者達。また金をせがむジプシーの子供。みんな無視した。暑い中、坂道をようやく登ってカセドラルへ。スペインの大司祭の主座だけあって、巨大で荘厳だ。なかで、しばらく涼んだ後、更に道の奥に進んだところにある Casa del Greco（グレコの家）に行った。本当はエル・グレコの家では無いらしい。彼が、ユダヤ人街のビリャーナ侯爵所有の家を借りて済んでいたことは確かだが、どこにその家があったのかは分からない。20 世紀の初め、国立観光局長の職にあったベガ・インクラーン公爵がエル・グレコの再評価が高まってきたので、観光政策としてトレドにエル・グレコの家を造ることを思いついた。そこで廃墟になったサムエール・ア・レビの館を買い、16 世紀の調度を並べ、エル・グレコの絵を集め、1911 年に開館したのがこのエル・グレコの家らしい。まあそんなことはどうでもいいが、中にはやはり一目でわかるエル・グレコの絵がたくさんかかっていた。トレドの町は小高い丘にそってできた町で、丘そのものが町のようになっている。町の中心が丘の頂上で、ここから下を見下ろすと赤茶けた大地に、緑がところどころに見えるいかにもスペインといった風景であった。コペンハーゲンを出てきたときとの、この気候の違いはすごい。激しすぎる。感慨にふけりながら町を下って、再び駅に向かう。ちょうど腹も減ってきたので駅前のバルで昼飯を食べる。

床はえびの殻が散らかり汚い。そういえば、スペインのバルでは食べかすを床に捨て、また汚ければ汚いほど、料理がうまいと判断され客がつくので店のほうでも掃除しないときいていたが、まさしくこれだ。とすれば、この店はうまいに違いない。いままでバルセロナのバルに行ったが、このようなことは無かった。マドリッドでは、考えてみればまだバルに入ってなかった。私も、えびのから揚げとサングリアを頼んだ。店の中のゲーム機からラ・クラカチャのメロディが流れる。これはこれからアンダルシアを巡る旅のなかで、あちこちで聞かれるもので、そのうち頭にメロディがこびりついてしまった。サングリアのあまり強くないアルコール度数のためか、ほの

かに酔った感じで気持ちがよくなり昨日のいやな事件のことがあまり気にならなくなった。

帰りは、普通列車で戻る。ゆっくりと、各駅に止まる。約１時間 30 分かかる。アトーチャ駅に向かう途中､車両基地があり日本の EF66 という電気機関車と告示した電気機関車が停まっていた。前述したように、スペインは 1620mm の広軌であり、日本は 1067mm の狭軌であり同じものであるはずはないが、あまりによく似ているので、おそらく日本のメーカーがスペイン国鉄用に作ったのだろうと考えた。アトーチャ駅からは、また SOL に行って、今日はどうしようかと考えたが、明日はいよいよアンダルシアに旅立つこともあり、また昨夜のこともあったから快適な宿で、ゆっくり夕飯を食べることにしてエル・コルテ・イングレスで食事とワインを買い込んだ。また、このデパートには本屋もあったので、英西・西英辞典が無いかさがしてみた。何とあのドイツで重宝したランゲンシャイドのシリーズが売っていた。やはり日本円で 800 円（800 ﾍﾟｾﾀ：1 ペセタ＝約１円なので計算しやすい）。迷わず購入した。ソルの気温計は４３℃。今日は、ゆっくり休もう。村田君はマラガに向けて旅立ったはずだ。

今日はコルドバに向かう。チャマルタン駅発が８：３０なので７：００には宿を出ようと思ったが、なかなか宿の主人が起きてこない。“オイガ”（スミマセン）“ブエノス・ディアス”（おはようございます）と何度も呼びかけて、ようやく主人が眠そうな目をこすりながら起きてきた。朝の７：００はまだ宵の口なのだ。これからも行く先々で同じことに悩まされることになる。精算し、メトロにのってチャマルタン駅に。

列車は、結構きれいな電車で、実はタルゴの次に優等なのではとおもった。発車するとしばらく地下を走った後、アトーチャ駅に到着した。なあーんだ、ここからでも乗れるんだ。考えてみれば、トレドに行く列車は、アンダルシア行きの本線上をしばらく走るのだからアトーチャ駅はその通り道のはずだ。

見慣れた光景を見ながら、アランフェスを過ぎる。これからは、まさにスペインの風景を楽しむことができる。ひまわり畑もたくさんあったが、以前アレックスとエバに聞いていたように、もうその盛りは過ぎ枯れたものもありあまりきれいじゃなかったが､最盛期の季節に訪れたらさぞかしきれいだろうと思われた。やはり、この列車は優等列車のようで、RENFE の雑誌と新聞のサービスがあり、また社内にはビデオが流れていて、ヘッドホンサービスもあったがまるきりスペイン語なので私はもっぱら車外の景色を楽しんだ。

カンポ・デ・クリプターナを過ぎると、有名な風車が見える。ラ・マンチャの風車である。コルドバには定刻の 13：20 よりわずか１０分くらいの遅れでついた。今日の宿は、地球の歩き方に出ていたメスキータのそばのホスタルにしよう。列車を下りると、すごい熱気。湿度も加わり蒸し暑い。シエスタに入っているだろう人通りの少ない町を歩いてホスタルに。受付のとき､“オートレ・ハポネス・・”といわれ、別の日本人と相部屋にしないかとのことだったが、なんだか疲れてしまって、今日は静かに一人で過ごしたい気分だったので“シングルにしてくれ”と頼み込んだ。結局ツインルームに入れられた。もしかしたら別の客が入ってくるかもしれない。それだったら日本人と一緒のほうがよかったのにと思った。しかし、結局シングルユースであった。

昼下がりのこのホスタル内で誰かがギターを弾いているが、これがまためちゃくちゃうまい。マドリッドとは違う暑さとあいまって、いやがうえにもアンダルシアの旅情を深めてくれた。荷物を置くと、飯を食べに町に出た。暑い。バルに入る。床が汚い。期待できそうだ。腹も減っていてたくさん頼んだ。今日はワインでなくビール（セルベッサ）に使用。ラクラカチャの音楽のスロットマシーンがここにもあり聞き覚えのあるフレーズが耳にこびりつく。ほろ酔い加減になり気分がよくなり今度は回教寺院（メスキータ）に行く。まさにイスラムの雰囲気。

（コルドバ、メスキータの周り）

さらにユダヤ人街に入り込むと、白い壁の家に緑の窓枠、窓辺の花、パティオにはオレンジの木と、想像していたのと違わぬアンダルシアの光景であった。メスキータのそばで、革のカーボーイハットを売っている人がいた。いくらかというと 1500 ペセタ。そんなに高くない。しかもこれからアンダルシアを回るのに重宝しそうだ。記念にもなる。値切りもせず買おうとしたら。日本人かときかれ、そうだと言うとなぜか 1300 ﾍﾟｾﾀに負けてくれた。“ムーチャス・グラシアス”（どうもありがとう）。グアダルキビール河にかかるローマ橋を渡る。この川を下るとセビリアである。しかしなんとスペイン的な名前なのであろうか。それにしても暑い。眠くなってきた。そういえば、シエスタをしていない。

宿に戻ると、部屋の入り口の前の中庭で、２人ずれの外国人がビールを飲んでいて、挨拶を交わし。一緒に飲まないかと誘われたが、“疲れているから勘弁してくれ”と断って、ベッドで寝てしまった。マドリッドと違い、ここは暑い。非常に寝苦しかった。それでも疲れと、ビールの酔いのため眠りこけてしまって起きたときには、周りも真っ暗になっていた。町からは、にぎやかなコンサートのような音と、ざわめきが聞こえる。そういえば今日は土曜日。何かの祭りなの

だろうか。しかし、今までの疲れがどっと出たのか。外に行く気にもならず、再び眠ってしまった。

　朝はさすがにここコルドバも涼しい。今日はグラナダに行く。シエラネバダ山脈を望む高原都市まではアクセスが難しく、いったんセビリアに行ってそこからローカル線で行かなければならない。マドリッドからの直通もあるようだが、それはコルドバのずっと手前のリナレスから別れてしまい、グラナダに向かうようだ。あさチェックアウトしようと思ったが、案の定７：００には誰もおきてない。大声で声をかけると、やはり眠そうな目のおばさんが出てきた。なんだか申し訳ない。

　通りを駅に向かう。涼しくて、別の町を歩いているようだ。町に人通りはほとんど無い。駅に着くとさすがに、まばらに人がいた。発車時刻表を見ると、なんとまもなくセビリア行きが着そうだ。しかし、いくら待てど暮らせど来ない。やっぱりスペインの列車かとあきらめた。時刻表を見直すと、注釈のところに domingo 何とかと書いてある。もしかしたら、domingo“ドミンゴ”て日曜のことで、それって、日曜運休と書いてあるのかなとランゲンシャイドを開いてみたらどうやらそのようだ。そうこうするうちに、別なセビリア行きが着たので乗り込んだ。結構込んでいるが、ひとつのコンパートメントに開いた席を見つけて乗り込んだ。ジプシーとおもわれる男の子が乗っていて、しきりにアミーゴ、アミーゴとよってくる、体を触ってくるので、もしかしたらこれって、財布を捜してんじゃないのかと邪推？して、軽くかわしていたがなんとなくうっとうしかった。本気で挨拶してくれているんだったら申し訳ないが。

　やがて、グアダルキビール川沿いに、いかにもアンダルシアの情景の中を列車はセビリアのプラザ・デル・アルマス駅についた。さて、ここからグラナダ行きが発車するサン・ベルナルド駅までは歩かなくてはならない。東京の上野駅、新宿駅のような感じだが、その間の連絡鉄道網がこちらには無いのが不便である。もう駅の外は、まばゆい陽光が照りつけ猛烈な暑さになっている。グアダルキビール川の川べりに沿って歩く。

　ようやくにしてサン・ベルナルド駅に着くと驚いたことに、村田君がいた。あれ、マラガに行くんじゃなかったっけ。彼は、予定を変更し、まずセビリアに滞在し、グラナダに行ってからマラガに行くコースにしたらしい。なんだか、とてもうれしかった。グラナダまで一緒に行けるのだ。発車時刻を確かめ、駅前のバルで食事をする。セビリアは昨日気温が４８℃あったらしい。どおりで、コルドバも暑かったはずだ。マドリッドの宿屋での辻強盗騒ぎを、村田君は知らなかった。こんなことがあったんだと話すと、彼はその後に宿に帰ってきたらしい。間一髪で難を逃れたようだ。あぶない。あぶない。

　セビリアのサン・ベルナルド駅 12：20-17：48 グラナダ着の予定である。列車はいかにもローカル線のディーゼル列車。なんとなくのどかで、気分がよい。アンダルシアの肥沃な大地をしばらく走ると、徐々に山岳地帯に差し掛かる。ここからは、赤茶けた荒野を列車はエンジン音を高めながら登りだす。途中、白い家の町々を通る。イメージ通りの風景だ。アンダルシア旅情満点。グラナダ到着。そんなに遅れてない。列車を降りるとき、４人組の日本人旅行者たちと知り

合った。みんなスペインが好きで、ばらばらにやってきたのだが、どこかで意気投合しそれからは一緒に旅しているらしい。中園さんという女の子は、外語大のスペイン語学科で学ぶ才媛でさすがに流ちょうである。みんなで一緒の宿にしようということになり、その中でもっとも年長のT さんが、いい宿を知ってるということで街中のホテルに連れて行ってくれた。ホテルの受付は、中園さんがやってくれた。ツインルームのシングルユースで 1000 円程度。夕食はみんなでフラメンコを見ながら食べようということになった。しばらくベッドで休む。グラナダは、高原都市でありマドリッドと同様、屋内は涼しい。このまま寝入ってしまいそうだったが、約束の時間になってしまった。

サクロモンテの丘、洞窟の中でフラメンコを見る。仲間がいるといいものである。一緒に踊った。ZAMBRA LA ROCIO という洞窟のタブラオ。最近のガイドブックにはサクロモンテは立ち入り厳禁と書いてあった。だんだん治安が悪くなってしまったのか。すばらしい踊りと、ギターの調べを聴いたあと拍手をすると、プロピーナ（チップ）とつきまとう踊り子達。そこで私は失敗した。あまりに良かったので一人に１００ペセタ渡したらさあ大変。ほかの踊り子まで群がってきた。挙句の果てに、もらえない踊り子が不公平だと怒り出す始末。やっとのことで、かわして外に出た。後に No Tengo“ノー・テンゴ”と言って突き放すべきであることは、セビリアで会うことになる小倉さんから聞いた。そこから少し下ったテラスでみんなで夕食を食べた。ターロ川を挟んでアルハンブラ宮殿が幻想的にライトアップされている。先ほどのチップの一件では、みんなで大笑いした。このような失敗はいい酒の肴になる。

明くる７月３１日は、何をおいてもアルハンブラ宮殿に行かなければ。今日も天気が良い。ゆっくり起きだして、アルハンブラ宮殿に向かう坂道を登る。途中、地元の若者に
手招きされたが、なんかやばそうだったので遠慮する。グラナダは、高原でもあり、それほど暑いという感じはない。快適だ。

アルハンブラとはスペイン語で赤い城の意味である。3 つの部分からなる。アルカサーバ Alcazaba（ここからの景色は絶景。アルバイシーン、昨日行ったサクロモンテの丘が見える。）、王宮（天人花のパティオ、獅子のパティオがある）、ヘネラリーフェ（夏の離宮で、全長 50mのアセキアのパティオがある）。かつてのナスル朝の栄華の後をしのんだ。ゆっくりと散策した後、野外のカフェテラスでサングリアを飲む。パナシェと言うビールとオレンジジュースのカクテルを知る。フランス人がよく飲んでいた。ここでまた、実家に絵葉書を出す。スペインのたびもだいぶ慣れてきた。勘定は“ラ・クエンタ・ポル・ファボール La cuenta, por favor.である。

（上：アルハンブラ宮殿よりアルバイシンを望む　下：宮殿内のパティオ）

午後は、ゆっくりとシエスタをとる。スペインでも、ことにアンダルシアではしっかりとシエスタを取るようで、この時間帯は店なども閉まってしまう。結局、旅行者も何もできなくなってしまうのである。郷に入らば、郷に従えである。夜は、新婚旅行で来ている中川さんご夫妻、村田

君と一緒になり、夕食をとる。ロンダやコスタ・デル・ソルのマラガに行く予定とのこと。楽しくおいしかった。羊の腎臓を食べたが、これはレバーのような味でまずかった。レストランの主人と記念写真をとったりと、楽しいグラナダの夜は更けていった。宿に帰るときには、１２時近くになっていたが通りには子供連れの家族もいっぱいいたのには驚いた。

翌朝、ホテルを出るときにはやはり宿の人は眠そうである。スペインで 7：00 はまだ夜明け前なのであろう。駅までは結構遠いので、途中で間に合わない可能性が出てきた。
駅までタクシーで行く。スペインでタクシーに乗るのは初めてなので、ぼったくられないようにあらかじめ値段を確かめた。シトロエンのタクシーで、やはり助手席に乗せてくれた。あとで気がついたことだがスペインのタクシーは、バルセロナを除いて、グラナダ、マドリッド、セビリアともにシトロエンであった。駅につくと、若干時間があったので、駅のバーで朝食を取る。
グラナダ 8：05-サン・ベルナルド 12：17 の、例のローカルなディーゼル列車だ。
一度通った道筋でもあり、ゆったりと景色を楽しみながら旅の思い出を反芻した。
中川さんたちは、今日はアルハンブラ宮殿も行くのか。村田君はマラガに向かっただろうか。確かに、コスタ・デル・ソルのマラガは魅力的でもあるが、アクセスが煩雑なので、後の予定に支障をきたす。私はセビリアに行こう。アルヘシラスというアフリカへの窓口の町にも行きたいが、これもちょっと難しい。
たいした遅れも無く、列車はセビリアのサン・ベルナルド駅に到着した。駅前のテラスで食事をしていると、手招きをしている人がいた。小倉さんという日本人だった。スペインでテキ屋をやって食いつないでると言う強者であった。いろいろ面白い話を聞かせてくれた。マドリッド郊外に畑（カンポ）ももっていて、そこで農作物も作っているそうだ。スペインにきたら、大変気に入ってしまって、いついてしまったらしい。ジプシーの子供が、例のごとく寄ってきたが、No Tengo!といってあしらうことを、教えてくれた。フラメンコを見たいといったら、ロス・ガジョスというサンタクルス街のタブラオが良いと教えてくれた。宿もその近くの安宿に決めた。フラメンコの店はすぐ前である。小倉さんがつきあってくれた。フラメンコは、２１時と、２３時の開園だそうだが、遅いほうが盛り上がるとのことで後半に行くことにした。
小倉さんと街を回るが、スペインはタクシーが安いそうで、タクシーを使いまくる。確かに安い。小倉さんと一緒ならまず安全だ。シエルペス通りというセビリアの繁華街に行く。ここにも、エル・コルテ・イングレスがあった。再びサンタクルス街に戻る。サンタクルス街はいかにもアンダルシア。カテドラル、ヒラルダの塔のあたりを散策。ヒラルダの塔：回教徒により 1193-1198 年に建立された。
ここで David（ニースの金持ちの息子で、ローザンヌで宝石鑑定士の勉強をしているらしい）と知り合う。一緒に町を回ろうということになり、彼が荷物を宿に置いてくるのに付き合う。ムーチョ・カロール（めちゃくちゃあついなー）と現地人と挨拶を交わす。昼の挨拶はセビリアでは、ブエノス・ディアスでなくムーチョ・カロールだそうだ。グアダルキビール河に飛び込む人たち。黄金の塔（キリスト教徒ガこの町を征服する前に、回教徒が 1220 年にたてた。）の見え

る、川沿いのテラスでビールを飲む。めちゃくちゃおいしい。セビーリアは伊達政宗の遣欧使節、支倉常長が初めてヨーロッパの土を踏んだ街。今では、グアダルキビール河の水位が下がり、船が航行できなくなり、港町では無くなってしまった。小倉さんとは、マドリッドで会う約束をして別れた。マドリッドアントニオ・ロペスのさる酒場の名前を教えてくれた。

（グアダルキビール川のほとりで、David と小倉さん）

アンダルシアは美人が多いから、是非酒場に行くべきだと勧められ、ロス・ガジョスの開演 11：00 まで、飲み屋で過ごす。確かに美人が多い。ドン・フアンはこの町の貴族の息子だし。カルメンがタバコ工場で働いていたのもこの町である。おぼえたてのスペイン語で、“イン・アンダルーサ・アイ・ムーチャス・セニョリータ・ブエノ”“アンダルシアには、美人が多いね。”などと世辞までロから出てくる。楽しいひと時を過ごして、１０時過ぎ宿に戻る。宿の主人に、隣でフラメンコを見てくると告げてから出かける。もし、終わって帰ってきたときにあけてもらえなかったら大変である。

開演前に、中に入りとりあえずサングリアを頼む。もう中は、客でいっぱいである。

１１時になり、フラメンコのショーが始まった。踊り子のおどりも、ギターの音色も圧巻である。また、グラナダで聞いたのとは異なり洗練されているような気がする。グラナダのはいかにもジプシーが、それで生計を得ているといった感じで、泥くさかった。それはそれでもちろん良かったのだが。次々と繰り出される、熱いフラメンコのリズム、音色、そして踊り。いやーすばらしい。わざわざ、セビリアまで着てよかったと思った。

ショーに酔ったといったほうが良いのかもしれない。時のたつのも忘れていた。お開きになると、時間はすでに午前一時を回っている。興奮冷めやらぬまま、宿に。果たして、宿の主人は起

きてくれているだろうか。大声で“オイガ”（すみません）とノックする。待ち構えていたかのように、すぐにドアが開き。ほっと、一息。ベッドに入って、すばらしい今日一日の思い出に浸った。さて、明日はカジスに行こう。これは、小倉さんにアルヘシラスには行けないし、と話をしたら、それじゃ、カジスに行ったらと勧められたものだ。ちょうどサン・ベルナルド駅から列車はたくさん出ているようだし。逢坂　剛の小説にそういえば“カジスの赤い星”という小説があったなあと思い出した。

昨夜は、暑くて寝苦しかったが、朝はとても涼しい。サンタクルス街から、タバコ工場（現セビーリア大学）を見ながらエスパーニャ広場へ。

鉄道でカジスに向かう。途中までは、昨日グラナダから着た線と同じである。ウトーレラという駅から別れてカジスに向かう。カジスはセビリアの 153 キロ先にある不思議な町だ。グアダルキビール川の河口の近く、大西洋に向かって突出した半島にある不思議な街だ。肥沃なアンダルシアの大地を、列車は南下する。カジスに近づくにつれ、道路などの標示がローマ字とアラビア文字になりアフリカが近いことが実感された。

途中 100 キロのところにシェリー酒の原産地ヘレス・デラ・フロンティラがある。結構大きな町である。そこからしばらく今度は、砂漠のような台地を走った後、どちらを見ても海の、長い砂州をわたってカジスに到着した。

（上左：グラナダのレストランで中川さん夫妻と、上右：グラナダ、サクロモンテの洞窟で
下左：村田君とセビリア、サン・ベルナルド駅、下右：カジスの全景）

泳ぎたかったので、通行人に“ドンデ・ナダール？”（どこで泳げるのか？“と聞くと。コルタ・デューラだと教えてくれた。さらに、バス停まで連れていってくれて、待っている人に、このセニョールがコルタ・デューラに行きたがっているから連れていてくれと頼んでいるようだ。そしたらその人が、一緒にバスに乗ってくれて、途中まで来ると、また別の人に同じように頼んで、更にまた途中まで来ると別の人が頼まれて、数人のリレーのおかげで無事たどり着いた。

まずトイレ。立ち売りに、どこにトイレがあるか？”ドンデ・エスタン・ロス・セルベシアス？“と言ったつもりが　ビールはどこだ？”ドンデ・エスタ・ル・セルベッサ？“と勘違いされたらしく、思いっきりよくビールを出してくれた。便所の事だと身振りで聞いて、ビールはその後だと言って教えて貰った。

ビールもうまい。レストランに荷物を預け泳いだ。気持ちいい。目の前に広がるのは、大西洋。アフリカ大陸は見えない。あまりに気持ちが良くて、ご機嫌だったので、荷物をこころよく預かってくれたレストランのボーイに 500 ペセタもチップをやったらびっくりしていた。そこから、しばらく歩いて、途中からバスに乗った。街では、ハシシをやらないかと勧められたが、捕まるのは嫌なのでやめた。

スペインではよくチーノ？（中国人か？）と聞かれる。日本人だ（ソイ・ハポネス）と答える。スペイン人は ジャッキーチェンの映画が好きらしいが、彼を日本人と勘違いしている。日本人というと、カラテ？と聞いてくる。私も調子に乗ってシーと言いながらかまえを取るとみんな、“おっ”と、びっくりする。俺と勝負しろなどと行って来る人がいなくてよかったものだ。酒場でよくこれをやって受けていた。　　（下：コルタ・デューラの海岸、海は大西洋）

帰りの鉄道の中で、またシガロとせがまれた。ノーテンゴと答えてやった。帰りの鉄道から見

える景色も、のどかなアンダルシアの光景で、気持ちが和んだ。夕飯は、またサン・ベルナルド駅のそばで食べる。

宿の主に、明日はマドリッドに行くから 7：00 に出るぞとあらかじめ言っておいた。
はたして通じたものか。“マニャーナ、アラスシエテ、バモス・ア・マドリ、テンゴ・ケ・イール・テンプラーダ”（明日、朝７時頃、私はマドリッドに行く。だから早く出なければならないのだ。）また、主人を起こすのに手間取ってはいられない。

７：00 に何と宿の主人がおこしに来てくれた。今度はタクシーで駅に行く。
セビリア、プラザ・デル・アラムス駅 8：30 発、マドリッド着 14：38 の特急である。
見慣れた光景を、快適な車内で過ごす。しかも、相席の人はいないとおもってくつろいでいると、なんと自動小銃をもった警官が座った。まあ、私は何も、悪いことをしているわけじゃないので、かえって安心だわいと思った。ただ、会話がないのも気まずいので、彼にアントニオ・ロペスの位置を聞いてみた。私の、マドリッドの地図で教えてくれてしかもプラガ・ホテルという日本人がよく泊まるホテルがあると教えてくれた。

赤茶けた光景を、北上。リナレス、バルデペニャス、マンサナレスと過ぎ。風車が、また見える。アルカサール・デ・サン・フアン、アランフェスと停車して、再び、マドリッドに到着した。
今回は、少し治安の良いところと思い、プリンセサ通りのあたりにホテルがないか聞いてみたら、５つ星しかない。結局、まあ、マドリッド最後の夜だし、三ツ星くらいまで奮発しようと思った。
そしたら、ホテルは何と一番危険なテレフォニカの裏のフエン・カナルにあるようだ。

Hotel Laris という三ツ星。まあ、ホテルが三ツ星なら大丈夫だろう。地下鉄で SOL まで行って。フエン・カナルへ。真昼なのに行くまでに怪しい男が何人もいる。明らかにジャンキーと思われる男も。荷物をおいて、散策へ。帰りはアントニオ・ロペスからタクシーで来ればいいじゃないか。そういえば、今日の飲み代がない。

エル・コルテ・イングレスの中に、両替もあるだろうと、店員に聞いてみた。“ドンデ・エスタス・カンビアール・ディネーロ？”（どこで両替できますか？）“シンコ・・” ５階のようだ。“ムーチャス・グラシアス”（ありがとう）。なかなか通じるものだ。ソルで時間をつぶす。立ち売りでオルチャータを買って飲む。これがなかなかうまい。アーモンドにスイカかメロンの種、それにチュファというカヤツリグサ科の植物の塊茎（クワイのようなもの）、これらをつぶしてジュースを抽出した物。マドリッドの乾いた暑さにはぴったり。
非常にうまい。マドリッドにいる間に、何度も飲んだ。待ち合わせ時間が近づいてきたので、警察官に教えられたとおりに地下鉄に乗ってアントニオ・ロペスの店の前に行く。

はたして、小倉さんはやってきた。タクシーでプエルタ・デル・ソルへ。ここで小倉さんと、さんざん飲んだ。なんとなく安心感もある。バルを３件くらいはしごした。グアダラハラからきた男。ハンブルグから遊びに来ているドイツ人。楽しさのあまり飲み過ぎた。例の空手のパフォーマンスもした。時計を見ると午前 3：00 やばい。時のたつのも忘れていた。これからあの危険なところにあるホテルに帰るのだ。しかも、ここからなら近すぎてタクシーは乗せてくれない。

小倉さんと別れてホテルに向かう。飲みすぎたのを後悔した。しかし、こうなったら仕方がない。自分は空手の達人だと思い込み、自分で暗示にかけてホテルまでナイフをもちながら歩く。さすがに、殺気だった様子からか、怪しいやつには誰も会わなかった。また道に迷ったらどうしようと思ったが、ホテルに着いたときにはほっとした。ボーイが、なんと鉄格子（昼間にはみなかった）をあけて入れてくれた。後は、ゆっくり休もう。さすがに、三ツ星だけはあってきれいなバスルームもある。バスタブにゆっくりつかった。

昨日はさすがに飲み過ぎた。二日酔いである。10：00 にプエルタ・デル・ソルで小倉さんと待ち合わせをしてある。荷物をホテルに預かってもらい、ガンガン痛む頭でソルに。

一緒にラーメンを食べた。ひさしぶりのラーメン。しかも 700 円程度で安い。うまい。
またここでは、日本の週刊誌を見ることができた。小倉さんと、また今度は日本で会いましょうといって別れた。日本からはめてきた安物の時計が壊れたのでエル・コルテ・イングレスで時計をかった。結局、散々悩んでかったのも５０００ペセタの日本製の時計だった。更に、町のお土産物屋をのぞくと、ちょうどいいお土産になりそうなかっこいいキーホルダーがあったので、後輩やクラブの仲間の分を大量に買い込んだ。また、荷物も増えてきたのでエル・コルテ・イングレスに戻り安物のビニールバックを買う。女物だったが、別に誰もわからないだろうと気にしなかった。ただこのバックの表には大きく“Lady”と書いてあるのだが。今日もオルチャータが非常にうまい。時間になり、地下鉄でチャマルタン駅に行く。いよいよこれから最終目的地のパリに向かう。考えてみれば、やはりスペインに来て良かった。

チャマルティン駅では同じ年頃の一人旅のフランス人と会話が弾んだ。モン・サンミシェルの事を言ったが通じなかった。あんなに有名なのに。私の発音が悪かったのであろう。彼は、ポルトガルに向かうとのことであった。ボン・ボアイヤージュを言って別れた。時間になり列車に乗り込む。きれいな列車だ。パリ行きの“プエルタ・デル・ソル” 18：10 発、私の番号は９２番。車掌にチケットとパスポートを渡して乗り込む。いろいろなことのあったスペインを離れるのだ。楽しいことも、怖いこともあった。感傷に浸りながら、窓の景色を眺める。ブルゴスにつくあたりで、女性 2 人と男性 1 人の同室者にスペイン語で“オイガ・アブロ・ウステ・イングレス？”（英語を話しますか？）と聞いたら、彼らは非常にびっくりして、“シー、シー”（もちろん）それ以来英語で会話が弾んだ。カジスでのセルベッサの顛末は大いに受けた。女性のうちベニルダはパリ大学で生化学の研究員をしているらしい。わたしより若干年上かな。弟がカセルドラといい、覚えにくい名前だと言ったら”教会”のことだと教えてくれた。若い方の女性はアントニアといいカセルドラの恋人で、一緒にパリ見物に行くらしい。日本のこと、スペインの事ではなしが弾んだ。刺身のこと。わさびのことなど。

スペイン人とイタリア人は、言葉が非常に似ているのでお互い、母国語を話していても話が通じるらしい。ベニルダ、カセルドラ、アントニア、お互いファーストネームで呼び合った。ベニルダは今度スペインに来たときにはマヨルカに是非行ってくれと教えてくれた。楽しいひと時をすごし、夕飯はみんな持込だったので分け合って食べた。腹もいっぱいになると眠くなり、アデ

ィオスで眠った。この列車は、パリまで直行できる列車だ。タルゴではないので、途中のアンディという国境駅で台車の付け替えがあるはずだ。もちろん、その間乗客は列車の中で寝たままだ。客をのせたまま列車を吊り上げて交換するらしい。

しばらく眠った後、金属的な音で目が覚めた。時間を見るとアンディに停車中の時間だ。まさに自分たちが台車の付け替えをさえている。Hendaya の停車時間は 2:08～3:36 である。またすぐに寝てしまった。

夜明け。カセルドラが一緒に朝食に行かないかと誘ってくれた。ベニルダ、アントニア、カセルドラで連れ立って食堂車に行く。席はほぼ満席で、アントニア、カセルドラが一緒、ベニルダと私は、一人分ずつしかあいてなかったので、それぞれ他人と相席になった。
食堂車からの帰りに、カセルドラと一緒にフランスの景色を見る。“スペインとは全然違うだろう。あの荒れた、激しい景色をみると、故郷に帰ってきたことを実感するんだよ。”
“たしかに、景色が穏やかでやさしい気がするね。”席に戻り、いろいろ話していると。今度は女車掌がやってきた。パスポートを返してくれる。なんだかつっけんどんで、みんなで顔をみあわせた。カセルドラが、スペイン語で悪口をいう。やわらかな、景色の中、徐々に建物が増えてくる。パリに近づいているのだ。最後の一走りをして、私たちをのせた“プエルタ・デル・ソル”はほぼ定刻（珍しい？）１０：３０にパリ。オーステルリッツ駅に到着した。素晴らしい仲間達。お互いの旅の成功を祈りあい別れた。いまになってみると、なぜこのとき写真でも撮って、住所を聞いておかなかったのだろうかと後悔した。なんか、あまりに打ち解けて、自然な形で友達になったので、それらの行為がいかにも日本人的でせっかくのいい印象が崩れるのでは、無意識のうちに危惧したのではないだろうか。何はともわれ、すばらしい旅の一こまであった。